

# 保育者による子どもの音楽的表現の観方に関する研究：たたく表現活動についての保育者の自由記述から

著者	横井 志保
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	53
号	1
ページ	43-48
発行年	2016-07-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000756">http://doi.org/10.15012/00000756</a>

〔論文〕

# 保育者による子どもの音楽的表現の観方に関する研究

——たたく表現活動についての保育者の自由記述から——

横 井 志 保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

## 要 旨

保育所保育指針、幼稚園教育要領の表現のねらいに書かれている「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」を、子どもの音楽的表現をただ受け入れ、見守ることであると誤解している保育者が多いのではないだろうか。そこで本研究では、保育者による同じ活動場面のDVD視聴による気付きや感想の自由記述から、保育者の音楽的表現の捉えを明らかにし、活動を支えるための音楽的表現の観方について考察することを目的とした。保育者の多くは音楽的表現活動の場面を観て評価しているが、先ずは子どもが楽しんでいるかどうかを観ており、音楽的な観方については、リズム、音色、強弱の3項目程度で、他の要素についてはほとんど捉えられていなかった。本研究から保育者には表現した瞬間に消えていく子どもの表現を支えるために、表現を捉える共通した音楽的観点が必要であることが示唆された。

キーワード：たたく表現活動、DVD視聴による評価、自由記述、観方、5歳児

## Study of Observation of Children's Musical Expression by the Nursery Teacher:

From the Nursery Teachers' Free Description Regarding the Drumming Expression Activity

Shiho YOKOI

Faculty of Health and sports  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2016年7月31日

## はじめに

保育所保育指針<sup>1)</sup>、幼稚園教育要領<sup>2)</sup>の「表現」のねらいには「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」とあり、内容の(6)には「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」(文中傍点は筆者による)とある。保育者に「元氣よく歌いましょう」と促され、子どもが嬉しそうに体をいっぱいに使って大声で怒鳴るように歌う姿は保育室でよく見られる光景である。保育者やクラスの友だち等と一緒に好きな歌を、楽しさを味わいながら表現していれば、表現のねらいは達成されていると言えるのだろうか。音楽的な観点をないがしろにしたような表現活動を現状のままなおざりにしてはならない。音楽的な表現は造形等とは違って形が残らない。表現すると同時に消えてしまう子どもの表現を、保育者が観点を定め捉えるならば、表現活動を形式的なものにはしないのではないだろうか。

これまでに、音楽表現に関する保育の自己評価より、保育の改善につながるチェックリストの開発の試み<sup>3)</sup>や質問紙による保育観と音楽観の違いによる活動への影響は明らかにされてきた<sup>4)</sup>が、どちらも保育者間によって評価対象の活動はそれぞれであり、明らかな違いや程度に差がある。また、同じ活動場面の録画記録の視聴により保育者がどのような事柄に注目し関心を持って見たかについては明らかにしたが、活動の音楽的な表現のみに焦点を当てた詳しい分析は未だしていない<sup>5)</sup>。そこで本研究では、保育者による同じ活動場面の視聴による気付きや感想の自由記述から、保育者の音楽的表現の捉えを明らかにし、活動を支えるための音楽的表現の観方<sup>注</sup>について考察することを目的とする。

## 方法

筆者が2010・2011年11月に行った、たたく表現活動の実践をビデオ撮影したものから、集団で行う活動場面Aと、個で行う活動場面Bの、それぞれ実践者の言語での指示や援助の少ない場面(A:6分50秒間、B:3分11秒間)を抽出して1枚のDVDにし、2011年12月、111名の保育者に見てもらい調査用紙の質問に回答を求めた<sup>6)</sup>。本研究では、「気付いたことや感じたこと」の自由記述より「子どもの表現について」記述しているものを対象として抽出し分析する。

## 〈子どもの音楽的表現とは〉

ドロシーらによると、就学前の子どもによって獲得すべき基本的概念として、1. 音色 2. ダイナミクス 3. リズム 4. メロディー 5. 形式 6. テクスチャーとハーモニーが挙げられている<sup>7)</sup>。また、小学校学習指導要領 音楽、第1学年及び第2学年における表現及び鑑賞の指導事項には、音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素及び反復、問いと答えなどの音楽の仕組みを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ることが挙げられている<sup>8)</sup>。

そこで、本研究における子どもの音楽的表現とは、音色、リズム、テンポ、強弱、拍、フレー

ズ（一体感やまとまり）、テクスチャ、繰り返し、をキーワードとし、これら全てでなくとも、いくつかの要素が含まれているものと位置づけた。（音楽的表現には旋律も含まれるが、本研究のたたく表現活動の場合のみ外した）

## 結果と考察

質問紙調査の結果から、自由記述は5つに分類された。1. 子どもの表現について 2. 活動そのものについて 3. 指導や援助について 4. ねらいについて 5. その他（表現していない席にいる子どもの様子等）の5項目であった。本研究の対象とした‘子どもの表現について’の記述全体の割合は、それぞれ活動A 62.2％、活動B 63.1％であった<sup>9)</sup>。

### 〈保育者の‘子どもの表現について’の観方〉

ここで‘子どもの表現について’の記述と分類したが、記述の内容は多岐に亘った。更に一人一人の記述内容も表現の様態や、音楽的要素について、表現する子どもの心情等と多岐に亘っていた。これらの記述から、音楽的表現活動場面の録画視聴であっても、保育者の観方（視点や捉え）は子どもの音楽的な表現に留まらないことがわかる。

以下に、子どもの楽しんでいる姿に関する記述や音楽的表現のキーワードの内容を含む記述の割合が多いものから順に表に示した。

表1 記述内容のキーワード別の割合

活動A		活動B	
楽しむ・楽しんで・楽しそう	64.6％	楽しむ・楽しんで・楽しそう	60.6％
音色	40.0％	リズム	50.7％
リズム	30.8％	音色	35.2％
強弱	12.3％	強弱	7.0％
拍・拍子	3.1％	拍・拍子	0.0％
繰り返し	3.1％	繰り返し	0.0％
速さ（テンポ）	1.5％	速さ（テンポ）	0.0％
フレーズ	0.0％	フレーズ	0.0％
テクスチャ	0.0％	テクスチャ	0.0％

### 1. 子どもの楽しむ姿

次に、記述の内容を具体的に詳しく見てみると（括弧内のA、Bは活動を示している）

- ・実践者とのやりとりがだんだんわかってきて、少しずつ楽しさを感じている様子が見られた（A）

- ・自分の思うように叩いて楽しむ姿が見られた (B)
- ・子どもたちは、叩くという行為をととても楽しんでいたと思う (A)
- ・自由にたたくところは楽しそう (A)
- ・男児の表情がとても楽しげで生き生きとしており子どもが主体的に参加していると感じた (B)
- ・子どもがすごく楽しそうだった (B)
- ・太鼓に限らず (鍋など叩いていて) 他に音の出るものを取り入れたことで子どもたちがとても楽しそうに叩いていたのはとても満足しているように感じられました (B)
- ・身近な片手鍋などを楽器に使っていてとても楽しそうであった (B)
- ・みんなでリズムのまねをするのは楽しそうだった (A)
- ・好きなようにたたいている時も楽しそうだったが、実践者の真似 (エコー) でたたいている時の方が楽しそうに感じた (A)

と、子どもの楽しむ姿についての記述が最も多かった。

保育者たちは音楽的にどうであるかということよりも、まずは音楽することを子どもが楽しんでいるかどうかという観点で活動を観ていることがわかる。領域の「音楽リズム」が「表現」に替わって既に四半世紀が経った。以降、移行期のみならず、領域「表現」を学んだ若い保育者たちも音楽的な指導や援助は子どもの主体的な表現を妨げると考え、ただ見守ることを良しとしてきたのではなかろうか。その結果が「楽しんでいるか」だけをまずは観ることに繋がっていると言えよう。

## 2. 活動の特徴を捉えた「リズム」「音色」「強弱」

表1の記述内容のキーワードについて見てみると、活動Bの個でたたく表現の音楽的特徴を捉えた「リズム」に関する記述が次に多く見られた。

- ・子どもは本能的にリズムを感じ、身体全体で楽しんで表現している様子が見られた
- ・子どもの自由な発想から生まれるリズムに驚かされた
- ・全身を使って自分なりにリズムを考えたとくところも考え工夫がみられる
- ・子どもが主体となり、みんなで音楽(リズム)をつくりあげている様子があり、よかった
- ・無言で体で感じたリズムでやりとりするのが、だんだん盛り上がっていくのは、大人にとっても子どもにとっても高揚感のあるものになっていくのだなと感じた
- ・お互い見合ってリズムを合わせる姿が子どもも気分よさそうだった
- ・リズムを子ども達自身で聞き取り叩く事、難しそうなりズムも聞き取れているところもあり、また色々な叩き方をとりいれたりしていてすごいと思う部分もありました
- ・1つの楽器でいろいろなリズムを体でも表現しているように感じられた
- ・リズムが、子どもの中から次々と出てきて、すごいと思った

一斉的でなく、子どもが個で好きにたたくBの活動において、このような子どものリズムの取り方や作り方についての記述が見られるのは当然の結果と言えるであろう。保育者があまり行わないような活動であるので、子どもの表現の仕方、特にリズムのつくり方に関心が示されたと言

えよう。

活動Bでは子どもが主体的に表現したものがリズムであるのに対し、集団的な活動Aでは、コールアンドレスポンスが中心となる活動であったことから、リズムに関するものよりも音に関する記述が多く見られた。

- ・子どもたちが思い思いに音をつくっている姿はおもしろいと感じた
- ・音の無い間を集中してよく聴き表現していた
- ・様々な楽器の音を楽しんでいる様子もあった
- ・自由にたいこなどの楽器をたたいていた子どもたちが次第にたたき方によって音の変化を楽しみ、色々な自分の考えたたたき方で工夫していた子もいました
- ・いろいろな太鼓で音色<sup>おんしき</sup>がちがうことも気付いて楽しめたように思う

と、音の変化を楽しんでいる子どもの様子や、敢えて音と音との間を捉えて記述するなど、音に関心が示された。

強弱についての記述は、活動AB共に多くはないが、以下のような記述がなされていた。

- ・実践者が子どもに叩き方を教えるのではなく、子どもの真似をしてみたり、音で掛け合いをしてみたりすることで、自然と強弱を使う姿もあった（B）
- ・たたくうちに強弱も加わり、自分なりの音が表現でき、また、まわりにいる子もその様子をくいいるようにみていた（B）
- ・強弱をまねるのはむずかしいのかなと思った（A）
- ・後半は、保育者の音をよく聞き、音の強弱やリズムを感じて遊んでいた（A）

記述には、同じ活動場面Aの記述であっても

- ・リズムの真似は楽しくできているようだが、強弱をつけるということは、あえて声かけをしないと自分たちではなかなか気づかない部分なのかと思った

と記述する保育者がいる一方で、

- ・先生が真似をして叩こうねという言葉がけがなくてもリズムや音の大小強弱を真似して叩いていた

と、相反する観方をする保育者もいた。前者は、別の質問で、この活動を音楽的な表現であると評価し、後者はどちらでもないと評価していた。この様に、保育者たちの音楽的表現の観方は様々である。提示した活動場面は、フレーズ、テクスチャ等が十分感じられる内容であったが、記述として表れなかったということは、保育者の音楽的表現の観点の盲点となっていると言えよう。

## まとめ

たたく表現活動の場合、リズムや音が特徴的であるので、それについての記述が多くなるのはわかるが、他の要素についての記述がほとんど見当たらない。本研究の結果からもわかるように、保育者たちの活動に対する意識の多くは子どもの参加態度であり、音楽の要素ではない。子どものための保育・活動であるので、一見、子どもを中心としたこの捉え方に異議を唱えるのはおか

しいようにも思われるかもしれないが、音楽的な活動は、子どもの遊びの中から自然に現れる性質のものではない。そうであるからこそ、保育者がしっかりと子どもの音楽的表現を捉える目を持つ必要がある。音楽的な表現活動は音楽が得意な保育者に任せていけば良いのではなく、保育者一人一人の音楽能力に拠らない、表現の観方に裏打ちされた活動の計画の立案、実践が大切となろう。「音も大きくなり気持ちが高揚していく様子が伺えた」と、音の大きさによる子どもの気持ちの高まりを読み取ることのできる保育者も必要であるが、「音の違い、強弱、高さ、テンポ、リズムなど自分でつくり出すたのしさを感じているように思えた」と、捉えた保育者の様に、どの保育者にも共通した音楽的表現の観方が必要となろう。

保育者の音楽的表現の観方の理解が、表現活動を支える一助となるという検証は今後の課題である。

## 注

本論で使用している「観方」とは、評価するという観点で価値判断するのではなく、子どもの音楽的表現は音楽的な成長、発達過程にあるという考えから、子どもの音楽的表現を見る時、観方という言葉を使用している。

## 引用・参考文献

- 1) 保育所保育指針 厚生労働省 2008
- 2) 幼稚園教育要領 文部科学省 2008
- 3) 古本奈奈代・児嶋輝美「保育の改善につながるチェックリストの作成―音楽表現に関する保育の評価を用いての検討―」教育情報研究 第30巻 第2号 2014
- 4) 田崎教子「「表現（音楽）」に対する保育者の保育観と音楽観―質的な質問紙調査をもとにして―」東京福祉大学・大学院紀要 第4巻 第1号 2013
- 5) 梅澤由紀子・横井志保「叩く表現活動モデルのDVD録画を、どう読み取るか―保育者への質問紙調査から―」愛知教育大学 幼児教育研究 第16号 2012
- 6) 前掲 5)
- 7) ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ『音楽的成長と発達―誕生から6歳まで―』溪水社 1999
- 8) 小学校学習指導要領 文部科学省 2008
- 9) 前掲 5)

## 謝辞

実践に協力してくれた幼稚園、保育園のおともだちと先生、調査にご協力くださった保育者の皆さんに感謝致します。